

領域「人間関係」の授業の向上に向けて（1）

学習環境の整理

上 林 那 津 子

田 窪 玲 子

1 問題意識と研究目的

近年、我が国では情報化社会・グローバル化が急速に進んでおり、これらに適応できる人材育成が求められている。大学教育においては、従来型の教員から学生へ一方的に教授する授業方法から、教員と学生が意思疎通を図りながら学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）へと転換することが推奨されている。その方法は、学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベート等の双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業である。畑野・溝上（2013）は主体的な授業態度が十分ではない学生に対してアクティブ・ラーニング型の授業を行うことで、受動的だった学生の意識を能動的に変化させる可能性を示唆している。また一方で、大学1年生は多くの授業を履修し授業に多くの時間を費やすため、授業外での学習時間が減少することや、その授業が主体的な学習態度を形成しにくいカリキュラムであること、そして高校生での受動的に学ぶスタイルを大学の授業においても継続していることも示唆している。¹⁾

保育者養成において、著者らは担当科目において、積極的にアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を試みている。なぜなら、学生は主体的に学ぶための援助をする保育者を目指しているため、その学生自身にも主体的に学んでほしいという思いがあるからである。しかし少数ではあるが、著者らの担当する科目では、居眠りをする学生がいるなど、主体的に学ぼうとする姿勢が学生から見受けられないのが現状である。また、保育者養成の専門科目は、他の分野とは異なり履修科目が多いため、学生は1年生に限らず他の学年においても授業に多くの時間を費やすことになる。なぜなら、保育者養成校では幼稚園教諭免許と保育士資格を取得することが目的であり、学生はその免許・資格取得に必要な多くの単位を修得することになるからである。

保育者養成のカリキュラムにおいて、2016年に「教育職員免許法」が改正され、2017

年には同施行規則も改正された。そのため、現在はカリキュラムの移行期となっており、2023年度には全ての養成校がこのカリキュラムに移行することになっている。²⁾

保育者養成のカリキュラムは変更されるが、幼児期の教育については幼稚園教育要領などが改訂されたとしても「幼児の発達の特徴を踏まえ、環境を通して行う」ことが基本であることには変わりはない。また、2018年の幼稚園教育要領・学習指導要領の改訂で「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が取り入れられたが、幼児教育においては目新しい方法ではない。なぜなら、「環境を通した保育」がアクティブ・ラーニングそのものといえるからである。幼児期の学びは小学校以降の教科とは異なり、5つの「領域」（健康・人間関係・環境・言葉・表現）という幼児の発達を捉える視点で示される。その中の領域「人間関係」は「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ことが目的とされている。領域「人間関係」は、保育の中でも特に「正解」を出すのが難しい分野である。このことについて、鯨岡（2010）は「保育者の子どもへのかかわりとして人間関係を考えれば、保育内容のすべてが人間関係だともいえるからです。言葉の領域、健康や環境や表現の領域に人間関係がかかわらないなどということはありません」と述べており、と保育内容の一領域として「人間関係」位置付けることに疑問を呈している。³⁾

主体的に学ぼうとする姿勢が見受けられない要因は、先述したようにカリキュラム上の問題であることも否定できない。一方で、学生と個別に関わる中で、先述した要因とは全く異なる要因があることがわかってきた。例えば、学びたい意欲はあるもが、部活動や家計を助けるためのアルバイト等学修時間に制約があることや、そもそも保育者になることを悩んでいる学生もいる。保育者になることを悩む理由について短期大学では、2年生の夏休み頃には既に実習を済ませ、就職活動が本格化していることから、自分の保育者としての適性をこれまでより真摯に受け止め考えていることが推察される。そのため、学生が主体的に学ぶための要因はカリキュラムの問題だけではなく、学生たちが置かれている状況や環境とした外的要因の影響もあるのではないかという視点から考察する必要があると考える。

そこで本研究では、筆者らが担当する領域「人間関係」の授業前に一度、授業後にもう一度アンケートをとり、学生たちのそれぞれの外的要因との因果関係を見ることができれば、私たち教員が尽力するのは、授業内容や指導法だけでなく、学生一人一人へのより細やかなサポートであるのではないだろうか。それを明らかにしたい。

2 研究方法

(1) 2校の概要

A校は兵庫県内にある4年制大学である。学科では保育士資格・幼稚園教諭一種免許状に加え、小学校教諭一種免許状・中学校一種免許状（英語）の取得を希望する学生が在籍し、該当授業は2年生前期科目として開講している。履修している学生はほぼ保育士資格、幼稚園教諭一種免許状を取得希望者であるが、免許・資格取得は希望しないが卒業単位取得のために履修している学生が若干含まれている。尚、A校の実習時期は、保育実習Ⅰが2年生後期、幼稚園教育実習・保育実習Ⅱ及びⅢは3年生前期であるため、該当授業の開講時には免許・資格取得に関わる実習は未経験である。学生は、例年通りであれば、1年次後期に大学の独自科目において、近隣の幼稚園・保育所にそれぞれ2回、学内の子育て支援室に1回見学実習に行くのだが、本研究の該当年次生は新型コロナウイルス感染症による影響により、幼稚園・保育園での見学実習をそれぞれ1回経験しただけとなっている。

B校は大阪府内にある幼児教育科の単科短期大学であるため、入学する学生の多くが保育者を志望している。そのため、B校を受験・入学する時点で、保育者志望という学生が多数を占める。該当授業は2年生前期に開講している。該当授業を履修している学生のほとんどが幼稚園教諭2種免許状、保育士資格の取得希望者であり、既に観察実習・教育実習（幼稚園）を終えている。また、同じ2年生前期の間に保育実習Ⅰも経験している。2年制後期には、保育実習Ⅱを履修する予定となっている。該当授業の履修を終える頃には、学生たちの就職活動が本格化し、自分の進路と真剣に向き合っていく時期となる。

(2) 研究方法

①質問紙調査1

A・B校ともに、該当授業の第1回目の授業前に「授業前アンケート」（以降「前アンケート」と呼ぶ）を取り、学生の学習環境・モチベーションについて質問をした。期間・対象は以下の通りである。

期間：A校 2021年4月6日～8日 B校 2021年4月5日～8日

対象：A校 2年生2クラス 53名 うち、回答者48名、回収率90.5%

B校 2年生2クラス 66名 うち、回答者65名、回収率98.5%

②質問紙調査2

A・B校ともに、該当授業の第15回目の授業後に「授業後アンケート」（以降「後アンケート」と呼ぶ）を取り、授業での学びの成果を質問した。期間・対象は以下の通りである。

期間：A校 2021年7月20日 B校 2021年8月1日～5日

対象：A校 2年生2クラス 53名 うち、回答者47名、回収率88.7%

B校 2年生2クラス 66名 うち、回答者62名、回収率93.9%

③回収率について

①.②の回収率の違いについて、質問紙記入にあたっては、前アンケートと後アンケートの関係性をみるために記名式の形をとったことが一つの要因である。他には、アンケート実施日の欠席である。今回の質問紙での記名による判断は研究目的としてのみ使用するものとし、授業評価などには一切関係しない旨を学生に説明し、了承を得られた学生にのみ回答を依頼した。学生にはこの研究内容や質問用紙、記名式であることに同意したことを、別の書面に署名してもらうようにした。

3 結果と考察

A・B校における前アンケート、後アンケートの双方ともに、有効回答と認められるもののみ比較検討を行う。A校の有効回答者数は47名、B校の有効回答者数は54名である。

(1) 学習環境

①自宅学習時間

学生の学習環境を把握するために、前アンケート・後アンケートともに1週間の自宅学習時間を質問した。また、後アンケートでは、この「人間関係」の授業における予習・復習時間（平均）を質問した。結果は以下の表1、2の通りである。

表1：1週間の自宅学習時間の合計比較

所属	質問紙		0-5 時間	6-10 時間	11-20 時間	21-30 時間	31-40 時間	41 時間以上	合計
A校	前	人数(人)	43	4	0	0	0	0	47
		割合 (%)	91.5	8.5	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	後	人数(人)	37	6	1	1	1	1	47
		割合 (%)	78.7	12.8	2.1	2.1	2.1	2.1	100.0
B校	前	人数(人)	51	3	0	0	0	0	54
		割合 (%)	94.4	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	後	人数(人)	39	10	1	2	1	1	54
		割合 (%)	72.2	18.5	1.9	3.7	1.9	1.9	100.0

表 2：人間関係の授業 1 回（90 分）のために費やした予習・復習時間（平均）

所属		1 時間以上	31 分から 1 時間	16 分から 30 分	5 分から 15 分	5 分以下	合計
A 校	人数(人)	2	2	12	23	8	47
	割合 (%)	4.3	4.3	25.5	48.9	17.0	100.0
B 校	人数(人)	3	21	15	10	5	54
	割合 (%)	5.6	38.9	27.8	18.5	9.3	100.0

表 1.2 より学生たちの自宅での学習時間がいかに短いかが分かる。表 1 において、A 校・B 校それぞれの前後アンケートの比較を行うと、どちらも前アンケートでの自宅学習時間が 10 時間以下ということが分かる。これは前アンケートをとったのが該当授業開始前であり、学生視点で見ると春休みが明けたばかりの時期にあたる。新年度の授業が始まっていないため、自主的にピアノの練習を行ったり、実習での振り返りを行ったりと学生が自分と向き合い勉強する期間となっているため、自宅での学習時間がより短くなっているのだと考えられる。その点、後アンケートでは両校ともに自宅での学習時間が増えた学生が数名いることが分かる。しかし、それでも 70%以上の学生は 5 時間以内、10%以上の学生は 10 時間以内であり、11 時間以上学んでいる学生は 10%程度にとどまることが見て取れる。

これは、両校に限ったことではない。中央教育審議会の報告によると、学部に関わらず 4 年制大学・短期大学ともに学生の自宅学習時間は平均 4.6 時間である。大学の学長、学部長は、学生の汎用的能力や授業外時の学習時間について不満足であること、高校生も学力中間層の勉強時間が最近 15 年間で約半分に減少したことを報告している。日本の大学生事情の一端がこのアンケートにおいても見受けられる。中央教育審議会でも、この学習時間の少なさを問題視しており、国としても改革を進めようと検討している。⁴⁾

②睡眠時間

本調査では、学生の生活の様子を把握するべく、睡眠時間についても質問した。金曜日と土曜日は週末にあたり、学生たちの睡眠時間が通常よりも大きく変動する可能性があるため、日曜日から木曜日という授業日前の睡眠時間の平均という聞き方をした。結果は以下の表 3 の通りである。

表 3 の両校における前アンケート・後アンケートでの結果によると、全体の 45%前後の学生が 6 時間以上の睡眠をとっていることが分かる。また、前アンケートと後アンケートそれぞれで見ると、前アンケート両校ともに 93%以上、後アンケートでは両校ともに 88%以上の学生が 4.5 時間以上の睡眠をとっていることが分かる。一方で、10%の学生は平均の睡眠時間が 4.5 時間以下となっていることにも注目しておきたい。

表 3：日曜日から木曜日（授業日前日）の平均睡眠時間の比較

所属	質問紙		4.5 時間以下	4.5-6 時間	6-8 時間	8 時間以上	合計
		A 校	前	人数 (人)	1	25	21
		割合 (%)	2.1	53.2	44.7	0.0	100.0
	後	人数 (人)	5	22	20	0	47
		割合 (%)	10.6	46.8	42.6	0.0	100.0
B 校	前	人数 (人)	3	22	29	0	54
		割合 (%)	5.6	40.7	53.7	0.0	100.0
	後	人数 (人)	5	25	23	1	54
		割合 (%)	9.3	46.3	42.6	1.9	100.0

③部活・アルバイトの時間

次に、月曜日から日曜日までの 1 週間における、部活・サークル・アルバイトの合計時間について質問した。

表 4：1 週間の部活（サークル含む）とアルバイト時間の合計比較

所属	質問紙		0-5 時間	6-10 時間	11-20 時間	21-30 時間	31-40 時間	41 時間以上	合計
		A 校	前	人数(人)	7	4	23	10	0
		割合 (%)	14.9	8.5	48.9	21.3	0.0	6.4	100.0
	後	人数(人)	12	10	10	10	3	2	47
		割合 (%)	25.5	21.3	21.3	21.3	6.4	4.3	100.0
B 校	前	人数 (人)	17	8	21	7	1	0	54
		割合 (%)	31.5	14.8	38.9	13.0	1.9	0.0	100.0
	後	人数(人)	19	7	18	8	2	0	54
		割合 (%)	35.2	13.0	33.3	14.8	3.7	0.0	100.0

表 4 の A 校の後アンケートにおいて、部活・サークル・アルバイトの時間が 31 時間以上となっている学生が 10%を占めるのは、A 校は部活動が盛んな学校であることが大きく影響している。A 校では部活動に力を注ぐ学生が多く、大学が休みである土曜日・日曜日

においても、1日のうちの長時間を部活動に充てる学生も多くいる。一方B校では、新型コロナウイルス感染症の影響により、アンケート調査を行った時点では、学内では部活・サークル活動はほとんど行われていなかった。その為、表4の結果は個人の趣味のサークルなどを除けば概ねアルバイトと判断することが出来る。短期大学生は、金銭的な理由から4年制の大学ではなく短期大学を選択した学生もいるのが現状である。

また、学習環境の把握の一貫として、前アンケートでは家庭状況についても質問した。その結果、A校は一人暮らしの学生が17%おり、B校では0%であった。また、家事を主に行っているのは自分であるか、家族や寮母などかという質問に対しては、A校が23.4%、B校が5.4%の割合で学生本人が家事を主にしていることがわかった。このことから、家族や寮母が家事を主に行っているの学生に比べて、家事を自分で行っている学生は、自分のために使える時間が少ないことになる。そのため、同じ課題を課せられた場合、課題を行うための時間が限られているため、十分な学習ができない可能性があるのではないかと考えられた。しかし、家事を主に自分で行っている学生たちの後アンケートの結果や、日頃の授業態度を見てみると、熱心に取り組んでいる傾向にある。彼らは、自分のために使える時間が限られているからこそ、時間を有効に使い、自己管理を適切に行っているのではないかと推察される。この結果については、学生一人一人の状況が異なるため、今後インタビューを行うなど、詳細に検討する必要があると思われる。

このように、学生の視点から考察すると、健康維持のための睡眠、自己実現のために必要な部活動、家計のために必要なアルバイト、そして資格免許取得のための必修科目における授業などで、多くの時間を費やしていることがわかった。

そこで、表3、表4のB校の学生において、睡眠時間と部活などの時間の割合が、それぞれで一番多かったデータをもとに、学生の1日の時間配分を考えてみた。

睡眠時間に6時間、アルバイトの時間に2時間(15時間を7日で分割し、1日あたりの時間を算出)、授業時間に9時間(9時から18時で休憩時間を除いた時間)、通学時間に2時間と想定すると、学生たちの自由時間は1日5時間はあるということになる。この時間から、生活に必要な時間(食事、入浴、身支度など)を差し引いたとしても、1日2時間の自由時間があることになる。つまり、1週間で14時間の自由時間が確保できることになり、この時間を勉強時間に充てることが可能ということになる。しかし、表1のB校における1週間の自宅学習が11時間以上の学生は10%に留まる。では、学生たちこの1日のうちの2時間をどのように活用しているのだろうか。

④優先順位

学生の日々の生活の中でアルバイト(保育系・その他)、部活、遊び、睡眠、動画、読書(保育系・その他)、自習、家事の10項目の中から、優先順位の高い上位3つについて質

問した。結果は以下の表 5 の通り。この優先順位とは、学生の中での心理的位置づけのことであり、優先順位とその活動における時間数は必ずしも比例するものではない。

表 5 によると、10 項目の中での優先順位が 1 位となったのは睡眠時間であることがわかった。しかし、表 2 の結果を見ると、睡眠時間に多くの時間を充てている学生は少ない傾向にある。10 項目のうち、先述した睡眠・アルバイト・部活を除くと、優先順位の上位は、遊び・動画視聴であり、自習は 1～3 位の割合を合計しても 10%以下である。

表 5：10 項目の中で優先順位の高いもの上位 3 つ

	A 校			B 校		
	1 位 (人/%)	2 位 (人/%)	3 位 (人/%)	1 位 (人/%)	2 位 (人/%)	3 位 (人/%)
アルバイト(保)	1(2.1)	2(4.3)	1(2.1)	3 (5.6)	2 (3.7)	3 (5.6)
アルバイト	9(19.1)	15(31.9)	7(14.9)	9 (16.7)	12 (22.2)	10 (18.5)
部活	12(25.5)	1(2.1)	0(0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.9)
遊び	3(6.4)	8(17.0)	9(19.1)	12 (22.2)	13 (24.1)	7 (13.0)
睡眠	15(31.9)	14(29.8)	12(25.5)	25 (46.3)	12 (22.2)	12 (22.2)
動画	4(8.5)	2(4.3)	15(31.9)	3 (5.6)	10 (18.5)	11 (20.4)
読書(保)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
読書	1(2.1)	0(0.0)	2(4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (7.4)
自習	0(0.0)	1(2.1)	0(0.0)	2 (3.7)	1 (1.9)	4 (7.4)
家事	2(4.3)	4(8.5)	1(2.1)	0 (0.0)	4 (7.4)	2 (3.7)
合計	47(100.0)	47(100.0)	47(100.0)	54 (100.0)	54 (100.0)	54 (100.0)

(2) 授業の学びの成果 (自己評価)

両校ともに、アクティブラーニングを行った。具体的には、学生が各授業においてグループワークを行い、そのグループワークの中でこれまでに得た知識を応用して実践的に学ぶこと、その学びについて学生同士で意見交換・発表をすること、そして各授業における学生の学びや質問・疑問について、教員がシャトルカードを活用してフィードバックをすることである。後アンケートでは学びの成果について、4 件法での自己評価と自由記述にて質問した。結果は以下の表 6、表 7 の通りである。

表 6 の結果より、多くの学生が授業を積極的に学び、目標を達成することができたと回答している。それぞれの回答に対し、自由記述で理由も質問した。B 校学生 O の自由記述を表 7 に示し、考察する。

表 6 : 学びの成果

		A 校 (47)				B 校 (54)			
		そう 思う とても	そう 思う	そう 思わ ない あまり	そう 思わ ない 全く	そう 思う とても	そう 思う	そう 思わ ない あまり	そう 思わ ない 全く
1	学ぼうと意欲や積極的な姿勢をもつてこの授業に臨んでいましたか。	13 (27.7)	30 (63.8)	4 (8.5)	0 (0.0)	17 (31.5)	36 (66.7)	1 (1.9)	0 (0.0)
2	この授業はアクティブラーニングでしたが、自分は能動的に学ぶことができましたか	8 (17.0)	32 (68.1)	7 (14.9)	0 (0.0)	15 (27.8)	36 (66.7)	3 (5.6)	0 (0.0)
3	この授業の到達目標を達成できたと思いますか	6 (12.8)	33 (70.2)	8 (17.0)	0 (0.0)	7 (13.0)	46 (85.2)	1 (1.9)	0 (0.0)
4	この授業でのグループワークは授業の目標を達成するのに役立ちましたか	13 (27.7)	28 (59.6)	6 (12.8)	0 (0.0)	29 (53.7)	24 (44.4)	0 (0.0)	1 (1.9)
5	教科書、配布資料、ビデオ等の教材や、教員の現場での話は授業を理解するのにあたって有用でしたか	28 (59.6)	18 (38.3)	1 (2.1)	0 (0.0)	34 (63.0)	19 (35.2)	0 (0.0)	1 (1.9)
6	シャトルカードは学びのふりかえりに役立ちましたか	17 (36.2)	24 (51.1)	6 (12.8)	0 (0.0)	24 (44.4)	27 (50.0)	3 (5.6)	0 (0.0)
7	この授業を受けて保育者になりたい気持ちは高まりましたか	14 (29.8)	29 (61.7)	4 (8.5)	0 (0.0)	29 (53.7)	25 (46.3)	0 (0.0)	0 (0.0)

表 7 の自由記述を読み解くために、B 校での授業内容を少し補足する。B 校では、該当授業の前に教育実習（幼稚園）に行き、そして該当授業期間中に保育実習 I にも行くことになっている。そのため、学生たちがその教育実習における子どもの姿や保育者の姿を具体的にエピソードで記述し、その内容を学生同士で共有し発表するというグループワークを数回行った。また、そのエピソードの共有の際には、幼稚園教育要領や保育所保育指針を用いながら、自立心・協同性・道徳性など領域人間関係のねらいや内容に関するものを共有するようにした。

このグループワークは、学生たちにとって自身の実習の振り返りとなり、次の実習への手がかりともなったようである。そして、学生同士でのこのようなエピソードの共有により、自身の配属クラス以外の年齢の子どもの姿を知ることが出来たり、自身の実習先以外の保育を知ることができ、様々な保育の在り方や保育者の関わりがあることを知ることが出来たようである。（表 7 の 1、3、7、「人間関係」の授業を通して何を学んだかの自由記述を参照）

表 7：学生 O の学びの成果（番号は表 6 の質問に対応）

問	回答	自由記述
1	とてもそう思う	仲間のエピソードを聞くことが楽しみでもあったから
2	そう思う	授業が変わるということよりも、私自身が能動的の理解をもう少しする
3	とてもそう思う	指針や要領を使いながら自身の体験を深く学びながら受けられた
4	とてもそう思う	様々な分野の問題について共有できたから
5	そう思う	実際のビデオはとても分かりやすかったし理解がしやすかった
6	そう思う	ノートに具体的な学びを書くこと
7	とてもそう思う	様々なエピソードやテーマから学べたので少しは自分の力になったと思う
「人間関係」の授業を通して何を学べましたか。		自身の実習での経験から指針や要領を使い照らし合わせながらすることで、子の関わりはこのような所につながるのだと学びを深めることができた。
この授業の感想を教えてください。		動画や社会の問題を調べ共有することで、自分の中の保育や子どもに関する視野が広がったように思います。

また、2 や 6 の自由記述においては、学生自身の学びの姿勢としてより積極的に努力しようとする姿勢が見受けられた。

ビデオ・動画資料では、著者自身の子どもの成長の様子を見せながら、乳児や幼児の発達過程を示した。教科書や文書だけで見る成長過程よりもビデオや動画資料を見ることで、より具体的なイメージが湧き、実習への意欲につながったものと思われる。(5 の自由記述を参照) 社会の問題を調べて学生同士で共有するという点においては、現代社会における子どもを取り巻く問題を扱った新書を複数選出し、3 人程のグループに分かれ、それぞれの新書の内容をまとめて発表するというグループワークを行った。現代における諸問題は保育者を目指す学生が正面から向き合い知るべき問題であると同時に、深刻な問題であるが故に受け止めるには心理的負担があるものが多い。そこで、授業の内容をグループワークにすることで、それらの深刻な問題をグループの中で受け止めることができるようにし、また一方で学生同士で話し合いながら発表の仕方を工夫するなどすることで、より能動的に知識の習得に繋がっているのではないかと考える。たとえ、自分のグループが調べる問題が一つであっても、他のグループの発表を聞くことで多くの問題について学ぶことができたようである。(7.授業の感想についての自由記述を参照) その他の回答で、A 校のある学生は自由記述で「授業を終えた後、気になったことがあれば個人で調べたりしていた」と回答しており、自主的に復習をしている姿を読み取ることができた。

一方で自己評価という観点から、学びの成果のハードルが低い学生も見受けられる。例えば、A 校では表 6 の質問 1 に対して「とてもそう思う」と回答した学生の自由記述の中には「欠席・遅刻をしない」というように、出席したことだけで満足してしまっている

学生もみられた。また、別の学生が質問4に対して「あまりそう思わない」と回答した学生の自由記述には「グループワークが少なかった。これといった目標がなかった。」と記述されていた。この学生は問1に対して「そう思う」回答しており、授業に積極的に参加していたと自己評価している。A校においては、2021年度前期では、新たな試みとして保育内容指導法を担当する専任教員が科目間連携授業を実践し、5領域の関連性が意識づける授業を行った。その内容は「お化け屋敷製作」で、3週間4科目に渡り、5～6名でグループワークを行った。先述した学生のように「グループワークが少なかった」と回答した学生がいることから、領域「人間関係」の授業であるという認識もなく参加していたと考えられる。さらに目標に関しては、シラバスに記載されており、授業の第1回目において授業の到達目標についての説明を行われていた。これらのことから、授業に出席することだけ満足し、学ぶ姿勢が見受けられない学生がいることがわかる。その要因の一つとしては、先述のようにA校の学生は幼稚園教育実習・保育実習未経験であるため、幼児の姿を具体的にイメージできず、漠然と学んでいる学生が少なからずいることも考えられる。

4 総合考察と今後の課題

(1) 大学の構造的問題による限界と可能性

学習状況の把握として、表1～4の結果より、健康維持のための睡眠・家計に必要なアルバイト・自己実現に必要な部活動の時間をみることが出来た。そして、幼児教育学科の大きな問題として挙げられるのが、保育士資格・教員免許を取得するためには、他の学部よりも多くの必修科を履修しなければならないことである。兼ねてから議論されている日本の大学と諸外国の大学の授業形態の違いを鑑みると、諸外国と日本の大学の週のコマ数(必修科目)に歴然の差がある。荻谷(2012)はアメリカ・イギリスの大学で教鞭をとった経験より、週に10種類以上の授業を細切れで履修させる構造自体が、この主体的に考える力の育成の大きな足かせになっていると述べている。さらにその背景には、日本社会全体の構造的問題が絡み合い、結果学習時間の確保を提言するに対策がとどまっていると言う。⁵⁾この著書が執筆されてから約10年が経とうとしているが、現状は大きくは変わっていない。例えばB校においては、短期大学であることや、保育の質を高めるために独自科目を置いていることなどもあり、学生は週20コマ前後の単位を履修している。そのすべての科目の予習や復習、課題を行うとなると学生たちは寝る暇もない。教員もその実情は把握しているので、学生のための課題提示はあるものの、予習や復習に対して声高に提唱するのは難しいのが現状である。保育の質を維持するのであれば、2年制には限界があると個人的には考えるが、大学の構造的な問題であるので、個々の教員の判断を超えたところの規定となる。現状としては、

学生が十分な学習時間を確保するのは厳しいと思われる。

一方で、OECD 国際幼児教育・保育従事者調査報告書（2018）によると、日本の保育者は全般的に、養成教育において幅広いテーマを網羅的、体系的に学んでいることが多いことが分かった。日本の保育者は養成課程教育と現職研修の双方を通して、幅広い内容についての専門的知識を学んでいる状態だと考えられると述べられている。⁶⁾ これは、先に述べた資格免許取得のために必要な必修科目が、保育の質を保証するために作られたものに他ならない。社会の現状を鑑みると保育者の専門性や必要性は増すばかりであり、それに伴い保育者を目指す学生が学ぶべき内容も増えていくのである。それを学生たちの主体的な学びに委ねるのは尚早のように思われる。学生たちは実際、限られた時間の中で課題や予習復習には取り組んでおり、自分なりに保育者を目指して努力をしている。私たち授業担当者にできることは、学生が自分自身のために専門知識を理解し、その専門知識における実践知を身につけられるように指導する、あるいは、学生が主体的な学ぶことができるために授業を改善していくかのどちらかであると改めて認識することができた。

（2）授業改善への道筋

当初は、学習環境の違いが学習成果にどのように影響を与えるのかを調査したいという思いがあった。しかし、今回のアンケートでの調査結果より、前アンケートでの回答項目と後アンケートでの回答項目を一つずつ抜き出し、順位相関係数の検定を行ったが、どの項目でも相関がみられるような数値を示さず、大きな相関関係を見ることができなかった。要因としては、後アンケートの学習成果が自己評価という点である。自己評価は自己肯定感の強い学生が自分を高く評価し、一方で自分に厳しい学生が自分を低く評価するという傾向がある。記名式のため、参考として実際の教員がつける当該科目の成績と授業後アンケートの成果を見てみたが、それも必ずしも一致しなかった。しかし、今回の調査ではアンケートデータと成績の相関をみるという説明を学生にしていなかったため、成績との相関も研究方法として取り扱うことができなかった。今後の課題として、前アンケートによる学生の学習環境と学習成果の相関を見るためには、どのような方法を取っていくのか検討する必要がある。

前後アンケートを比較しても、相関関係を見ることは出来なかったが、その比較の中で、授業の内容によって、学生たちのモチベーションが上がり、学習成果を感じている可能性があることが分かった。つまり授業が開講される前からモチベーションが高かった学生だけでなく、モチベーションが高くなかった学生も、授業の内容によって、授業に取り組む意欲が増進されたのである。これは前アンケートと後アンケートをそれぞれ記名式にしたことにより、同じ学生の記述として比較を行うことができた。今回は大まかな全体像のみの考察となったが、今後はその結果の精査も踏まえつつ、より良い授業改善につなげてい

きたい。

藤埴(2018)は自習が専門知識とジェネリックスキルの習得に正の効果があることを分析より示している。教員の指導力に関して、特に「個別化促進」と「ジェネリックスキルへの効果」が大きな正の影響を与えていることを示した。「個別化促進」の観測変数は「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される(コメント返却)」「授業中に自分の意見や考えを述べる(考え方求められる)」「グループワークなど、学生が参加する機会がある(グループワーク)」ことであり、学習の個別化を刺激するこうした教員の働きかけが、特に応用分野において、自習という自己決定的な学習を活性化していることが明らかとなったと述べている。⁷⁾

その点について振り返ってみると、A校B校ともに、著者らが担当する「人間関係」の授業では、コメント返却、考え方を求める、グループワークといった授業形態を取っている。詳細な内容については稿を改めて論じたいが、授業形態の効果が後アンケートの結果につながっているように捉えられる。今後さらに内容を深化させ、次の研究に繋げたい。A校とB校は、2校の概要にも示したが、それぞれの大学の状況が異なるため、単純に比較することは難しい。しかし違う状況だからこそ、共に授業研究を行うことで、4年制に通う学生も短期大学に通う学生も同じように質の高い保育者を目指せるよう、必修科目担当者としてよりより授業検討を行っていききたい。今後は、2校の授業において、同じ教科書を使用したり、グループワークや授業内容を2校の授業で共有したりするなどしながら、授業研究を進めていきたい。

(3) 学生へのサポート体制

本研究の問題意識と研究目的において、それぞれの学生の置かれている状況によっては、授業内容の改善の前に、学生への細やかなサポートの必要性があるのではないかと述べた。しかし、それぞれの学生の置かれている状況に関わらず、授業内容の改善にさらに邁進する必要があり、それによって学生の保育者への意識がさらに高まることに期待できることがわかった。表1の結果より、自宅学習の合計時間が30時間以上の学生が2人いたり、1回の授業に費やす予習や復習の平均時間が1時間以上の学生も2~3名いたり確認することができた。また、表5の結果では、保育系のアルバイトを体験的学びの時間と捉えると、保育系アルバイトや自習時間を優先順位の3位までに挙げる学生が5%前後いることがわかった。それぞれの人数は決して多くはないが、保育者を目指して真摯に勉学に励む姿を確認することが出来たのである。アンケートにおける相関関係までは見ることが出来なかったが、このような学生たちの授業態度は良く、また授業での成績も高い。

今回は細やかな記述は出来なかったが、家事を主に行っている学生がいることや、グループワークにおいて学生同士のコミュニケーションに苦勞している学生がいること、睡眠時間

が少ない学生がいること、進路に悩みを抱いている学生がいることなどが明らかとなった。数としては、例え一人の意見であったとしても、一人だからこそ、学生自身は誰にも相談できず苦しんでいる可能性もある。人間関係という授業を担当する者としては、そのような学生にこそ人間関係の学びの中で光を感じてもらいたい。また、そのような学生たちの経験や思いが、子どもに寄り添う温かな態度を養うことができるのではないかと期待している。履修科目数や課題が多いという状況にある中で、学生たちが精神的に追い込まれないためにも、担当教員の細やかなサポートの必要性があるということは述べておきたい。これは「人間関係」を担当している教員だけでなく、養成校教員として全体的に学生たちをサポートしていくべきだということでもあるが、今後の研究としてはアンケートではなくインタビューなど違う形でアプローチが出来るように検討していく。

引用・参考文献

1. 畑野快・溝上慎一『大学生の主体的な授業態度と学修時間に基づく学生タイプの検討』日本教育工学会論文誌 37 (1) 2013年 13-21頁
2. 文部科学省『再課程認定申請について』2017
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/08/29/1388004_4_1.pdf 2021年9月15日 情報取得
3. 鯨岡峻『保育・主体として育てる営み』ミネルヴァ書房 2010年 31-32頁
4. 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』平成24（2012）年8月28日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm 2021年8月26日 情報取得
5. 荻谷剛彦『グローバル化時代の大学論②イギリスの大学・ニッポンの大学 カレッジ、チュートリアル、エリート教育』中央公論新社 2012年 212頁
6. 国立教育政策研究所編『幼児教育・保育の国際比較―働く魅力と専門性の向上に向けて―』OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書 2018 76-118頁
7. 藤埴智一『学士課程教育における自習の効果とその促進要因―「全国大学生調査」の分析―』宮崎大学 教育・学生支援センター紀要第2号 2018 11-18頁
8. 走井洋一『保育内容「人間関係」の課題：高度専門職としての幼稚園教員の養成課程の構築に向けて』東京家政大学教員養成教育推進室年報 2018年 133-141頁
9. 浅野志津子『学習動機が生涯学習参加に及ぼす影響とその過程―放送大学学生と一般大学大学生を対象とした調査から―』教育心理学研究 50 2002年 141-151頁
10. 水津玉美『保育者養成校におけるアクティブ・ラーニングを取り入れた授業形態』下関短期大学紀要第39号 2021年 1-13頁

11. スーザン A.アンブローズ、マイケル W.ブリッジズ、ミケーレ ディピエトロ、マーシャ C.ラベット、マリーK.ノーマン著 栗田佳代子約『大学における「学びの場」づくり よりよいティーチングのための7つの原理』2014 玉川大出版
12. 菊池篤子『ワークで学ぶ 保育内容「人間関係」』2019 株式会社みらい
13. 無藤隆、古賀松香 編著『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは』2016 北大路書房
14. 直井玲子『保育内容「人間関係」の授業における学びについての一考察』松山東雲女子大学人文科学部紀要 25 2017 86-95 頁
15. 鬢櫛久美子『「教育原理」における授業改善の試みとアクティブラーニング』名古屋柳城短期大学研究紀要 第41号 2019 57-71 頁